

## 「強く、雄々しくあれ」

ヨシュア記 第1章 1節～9節

説教 本庄 侑子伝道師

人生の節目に響く神様の言葉があります。「わたしはモーセと共にいたように、あなたと共にいる。あなたを見放すことも、見捨てることもない。強く、雄々しくあれ。」(5、6節)

人生の中で、これ迄とは違う節目に足を踏み入れる時があります。ヨシュアもまた、節目を迎えていました。それは、思いがけなく降りかかって来たもので、強いられた節目でした。節目において、私たちは予定の変更を余儀なくされます。気持ちを切り替えれば仕切り直せる節目もあれば、人生が根こそぎ崩され未来が全く見えなくなる節目もあります。

この時ヨシュアに降りかかったのは、モーセの死であり、また、新しい地に入って行くという節目でした。この時のヨルダン川は、水位が増している時でした。ヨシュアが率いなければならぬ人々の中には、小さい子どもや高齢の人たちもいたのです。モーセですら経験していない所に立たされてしまったのです。

そして、このヨシュア記を記した人々も節目に立っていました。自分たちの犯した罪の結果として“バビロン捕囚”の中にあつたのです。モーセが死に、歴史が途切れた節目に、自分たちの国の滅びという節目を重ね合わせます。取り戻せない過去への後悔と悲鳴です。これから越えて行かなければならない濁流があります。

しかし、彼らの歴史は今日まで伝えられてきました。ヨシュアも、捕囚の中にあつた人々も、節目を乗り越えて来たということです。節目から始まった神様のできごとがあつたのです。

ところで、ヨシュアという名前ですが、これはイエスのヘブライ語の読み方で、“主は救う”という意味があります。救い。それは、罪からの救いです。神様抜きで生きる罪。それは、孤独であり、破壊です。私たちもまた、孤独と破壊の中にありますが、神様から呼び戻されるのです。今日、私たちが聴いているのは、“罪”という最も越えがたい節目をも、神様によって乗り越えさせて頂いた話なのです。

神様は「強く、雄々しくあれ。」(6節)と、節目にある人々に仰います。これは、“頑張れ”と、叱咤激励する言葉ではありません。ある人は、この言葉を「固く結ばれていなさい。」と訳します。神様の強さに固く結ばれていなさいと言うのです。「雄々しくあれ」は、英語の聖書で

「Be courageous(勇敢であれ)」です。これは、イエス様もあらゆる場面でお語りになった言葉です。「元気を出しなさい。」「安心しなさい。」「勇気を出しなさい。」と。イエス様は、私たちが恐れ、もがく時、後悔し、自分を責める時に「安心しなさい。私だ。あなたを救う私がいる。」と言って救い出して下さるのです。

ヨシュアは「主御自身があなたに先立って行き、主御自身があなたと共におられる。」(申命記 第31章7節)という約束も加えて与えられました。主ご自身が先立って行き、共にいて、道を切り拓いて下さいます。私が責任を持って導くから安心してついて来なさいと、お招きになります。

6節の「与える」は、聖書の元の言葉では、既に「与えた」です。ヨシュアがまだ見ぬ先から、神様は約束を成就し、土地をお与えになっているのです。しかし、これが現実になるには、ヨシュア自身が招かれた道に踏み出し、その足の裏で土地を踏みしめなければなりません。「成功」(7、8節)とは、神様が共におられるという事です。神様は節目を越えさせて、“主は救う”というご自身の救いのご計画に導き、務めを与えて、成功させてくださいます。

ヨシュアもその一行も、荒れ狂うヨルダン川を避ける事もできたでしょう。しかし、目の前の現実を見るのでは無く、神様を信じ委ねてヨルダン川に足を踏み入れました。一步踏み出した時、川の流れは断たれ、すべての人々は渡り終えました。神様の奇蹟が起こり、節目を越えて行ったのです。

教会も、主の復活の日曜日に、このヨルダン川の前に立っています。主の復活により、私たちの罪や失敗を、神様による赦しと成功に変えて頂く節目に立たされます。御言葉により信仰の一步を踏み出し、川向こうの恵みと務めとを受け取って進みます。死も罪も、それを阻むことはできません。身を委ねて踏み出すその道は、永遠の御国へと続いて行きます。

濁流の節目の中でこそ聴こえる神様の声があります。私たちの足の裏で踏みしめて行く番がやって来ました。「立ち上がり、ヨルダン川を渡りなさい。強く、雄々しくあれ。私が共にいる。」

(記 説教要約奉仕者)